

中尾原遺跡

2005年

日田市教育委員会

中
尾
原
遺
跡

日
田
市
埋
蔵
文
化
財
調
査
報
告
書
第
5
9
集

2
0
0
5
年

日
田
市
教
育
委
員
会



中尾原遺跡遠景（東から）

序 文

中尾原遺跡は、眼下に市街地を見下ろす日田盆地東部の台地上にある遺跡で、現在この台地全面には畑が広がり、日々農作業が行われています。

今回の発掘調査は、この台地の裾部に広がる住宅地や集落の生活用水を貯うためのタンク施設増設に伴って調査を実施したもので、縄文時代の人々が生活した痕跡や、近世期以降の溝や土坑などが見つかри、これまで調査例のなかったこの遺跡の様相を知る一端となりました。

このような調査の記録をまとめた本書が、これからの文化財保護や地域の歴史の解明、また学術研究や教育現場での資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました市水道課ならびに調査中にさまざまな便宜を図っていただきました調査地周辺の土地所有者および耕作者の方々、また酷暑の中作業に従事いただきました地元の皆様方に対し、心から厚く御礼を申し上げます。

平成17年3月31日

日田市教育委員会

教育長 諫 山 康 雄

例 言

1. 本書は、東部地区簡易水道事業に伴い日田市教育委員会が平成16年度に実施した中尾原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査にあたっては、市水道課をはじめ、地元の方々のご協力を得た。記して感謝申し上げます。
3. 調査現場での実測・写真撮影は行時が行い、中村・杉森・梶原隆介の協力を得た。掲載遺物実測・製図は行時が行った。
4. 掲載した遺物写真は、長谷川正美氏（雅企画有限会社）の委託による。
5. 空中写真撮影は、九州航空株式会社に委託し、その成果品を使用した。
6. 出土遺物および図面、写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
7. 本書の執筆・編集は行時が担当した。

本 文 目 次

I . 調査に至る経過と組織	1
II . 遺跡の立地と環境	2
III . 調査の内容	3
IV . まとめ	8

挿 図 目 次

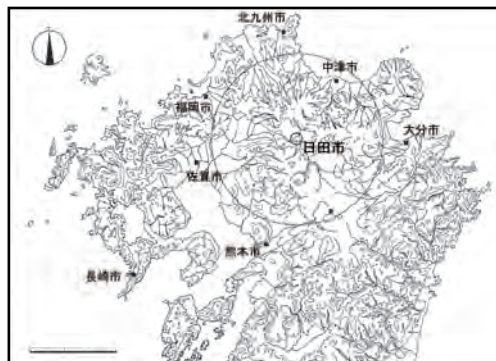
第1図 遺跡位置図 (1/5,000)	1
第2図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	2
第3図 基本土層図 (1/20)	3
第4図 調査区位置図 (1/500)	3
第5図 遺構配置図 (1/150)	4
第6図 1号集石実測図 (1/20)	5
第7図 1号溝・1～3号土坑実測図 (1/40・1/80)	6
第8図 出土遺物実測図 (1/2・1/3)	7

表 目 次

第1表 出土土器観察表	8
第2表 出土土器観察表	8

写真図版目次

巻頭写真図版 中尾原遺跡遠景 (東から)	
写真図版1 調査区全景／1号集石／1号集石完掘 状況／1号溝／1号溝土層	
写真図版2 1号～3号土坑／縄文土器出土状況 (集石周辺)／縄文土器／近世陶磁器 ／石器	



日田市の位置

(I) 調査に至る経過と組織

東部地区簡易水道事業は、上水道が未整備である日田市東部の有田地区の生活用水を確保するため、昭和49年度に須ノ原台地に簡易水道施設が設置されたことに始まり、給水人口の増加に伴い昭和53年度に池辺原台地に第二配水池が、昭和60年度には羽田地区に第三配水池が設置された。その後も周辺には住宅地が増加し続け、夏場の水不足が懸念されるため、今回第二配水池にタンクを増設する計画が持ち上がったものである。平成15年秋にこの計画が水道課から文化課に知らされ、埋蔵文化財の有無を調査したところ、建設予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である中尾原遺跡に該当し、事前の現地踏査で土器が収集されたことから遺跡の存在が確認されたため、その後は発掘調査の実施を前提に協議を進めた。

発掘調査はタンクの設置位置が詳細には未確定であること、また将来タンクのさらなる増設の可能性を考慮すると今回の設置位置は用地の東半分にはなり得ないとのことから、市有地の西半分を対象に8月18日から調査を開始し、2度の台風と長雨に見舞われながら10月14日に全ての作業を完了した。調査に関する日誌は下記のとおりである。

- 8月18日(水) 重機による表土除去・遺構検出
- 20日(金) 作業員による遺構検出および近世遺構掘下げ作業
- 9月13日(月) 縄文包含層掘下げ作業
- 10月1日(金) 空撮
- 13日(火) 機材撤収
- 14日(水) 埋め戻し、発掘調査終了

なお、調査組織は、次のとおりである。

- 調査主体 日田市教育委員会
- 調査責任者 諫山康雄 (日田市教育委員会教育長)
- 調査統括 後藤 清 (同文化課長)
- 調査事務 高倉隆人 (同課長補佐兼埋蔵文化財係長)
- 伊藤京子 (同副主幹)
- 調査担当 行時桂子 (同主任)
- 調査員 土居和幸 (同主査)
- 若杉竜太 (同主任)
- 渡邊隆行 (同主事)
- 中村邦宏 (同主事補)
- 調査補助員 杉森久恵
- 調査作業員 諫元正隆、荏隈マサ子、梶原隆介、河部松子、五島絹代、田中傳江、中島カズ子、本松シヅエ、森本絹子、吉長利夫
- 整理作業員 聖川暢子



第1図 遺跡位置図(1/5,000)

(II) 遺跡の立地と環境

遺跡は盆地東部、標高約160mの通称池辺原と呼ばれる台地上に位置する。この池辺原台地は、北側に広がる中尾原と呼ばれる台地とつながって全体を中尾原遺跡と称され、これまで調査例はないものの弥生時代・古墳時代の包蔵地として周知されている。今回の調査区はこの中尾原遺跡の南西部突端にあたる。中尾原遺跡を挟んで東西に広がる沖積地には数多くの遺跡が分布している。

中尾原遺跡の東側には、北流する求来里川を中心として沖積地には弥生時代から中世にわたる集落跡と墓地が見つかった尾漕遺跡^(注1)（9）や、縄文時代の埋甕や中世の集落と墓地が見つかった森ノ元遺跡^(注2)（10）が、西側丘陵上から裾部には弥生時代から古代の集落や墓地である馬形遺跡^(注3)（11）がある。また中尾原遺跡から北に向かって舌状に伸びる小丘陵には古墳時代の石蓋土壙墓を中心とする墓地である大迫遺跡^(注4)（8）や、3基の円墳からなる中尾原古墳群^(注5)（7）がある。

目を西に転じると、小谷を挟んで北西には弥生時代の集落である佐寺原遺跡^(注5)（4）と、そこからのびる急傾斜地には古墳時代の横穴墓である佐寺横穴墓群^(注4)（5）がある。特に佐寺原遺跡では弥生時代前期末の住居跡が見られ、日田の弥生時代では最も早く北部九州の文化を取り入れた遺跡のひとつである。この佐寺丘陵からさらに西側には現在の市街地が広がり、縄文時代の溝や弥生時代から古代にわたる集落跡である大波羅遺跡^(注6)（13）、古墳時代の溝から多数の木器が確認された赤迫遺跡^(注7)（12）、円筒埴輪が採集された径約30mを測る円墳・薬師堂山古墳^(注8)（14）、古代末に台頭し中世の日田を治めた大蔵氏の居城とされる大蔵古城跡^(注9)（2）とその麓に広がる関連施設と見られる井戸や石組などが見つかった慈眼山瀬戸口遺跡^(注9)（1）がある。



その他にも、弥生時代から中世の集落の会所宮遺跡^(注10)（15）、古墳時代の墳墓や中世の笠塔婆と塚が確認された元宮遺跡^(注11)（20）、装飾古墳1基を含む7基からなる法恩寺山古墳群^(注12)（21）など、中尾原遺跡の周辺は幅広い時代にわたって遺跡が密集する地域といえる。

注

- 1) 村上久和他編 『尾漕遺跡』 大分県教育委員会 2000
- 行時 志郎編 『尾漕遺跡』 日田市教育委員会 2001
- 2) 行時 志郎編 『森ノ元遺跡』 日田市教育委員会 1998
- 3) 土居和幸他編 『馬形遺跡』 日田市教育委員会 1998
- 4) 村上久和他編 『日田条里遺跡群/佐寺横穴墓群/大迫遺跡/白岩遺跡/下綾垣遺跡』 大分県教育委員会 1997
- 5) 村上久和他編 『佐寺原遺跡/尾漕遺跡群/有田塚ヶ原古墳群』 大分県教育委員会 1998
- 6) 渡邊隆行他編 『大波羅遺跡』 日田市教育委員会 2001
- 村上久和他編 『大波羅遺跡』 大分県教育委員会 2001
- 7) 土居和幸他編 『赤迫遺跡』 『平成5年度埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会 1995
- 8) 後藤 宗俊 「第3章古墳時代2.日田地方の古式古墳」 『日田市史』 日田市 1991
- 9) 坂本 嘉弘編 『慈眼山瀬戸口遺跡』 大分県教育委員会 1992
- 10) 土居 和幸編 『会所宮遺跡』 日田市教育委員会 1996
- 11) 若杉 竜太編 『元宮遺跡』 日田市教育委員会 2000
- 12) 賀川 光夫編 『法恩寺古墳』 日田市教育委員会 1959

- | | | |
|-------------|------------|-------------|
| 1. 慈眼山瀬戸口遺跡 | 2. 大蔵古城跡 | 3. 丸山古墳 |
| 4. 佐寺原遺跡 | 5. 佐寺横穴墓群 | 6. 中尾原遺跡 |
| 7. 中尾古墳群 | 8. 大迫遺跡 | 9. 尾漕遺跡 |
| 10. 森ノ元遺跡 | 11. 馬形遺跡 | 12. 赤迫遺跡 |
| 13. 大波羅遺跡 | 14. 薬師堂山古墳 | 15. 会所宮遺跡 |
| 16. 会所山遺跡 | 17. 鳥羽塚古墳 | 18. 会所宮古墳 |
| 19. 後山古墳 | 20. 元宮遺跡 | 21. 法恩寺山古墳群 |

第2図 周辺の遺跡分布図（1/25,000）

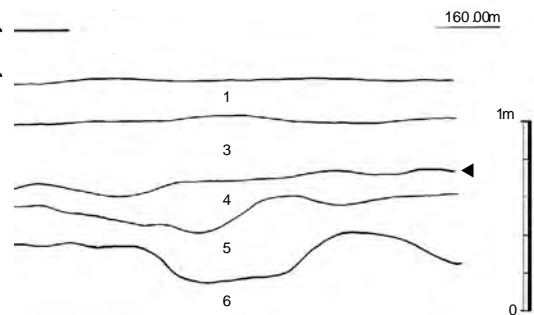
(Ⅲ) 調査の内容

(1) 調査の概要 (第4・5図、図版1)

現地踏査の段階で周辺の畑地から土器が採集され、遺跡の存在する可能性が高いと判断されたことから、今回の調査はまず調査予定地に重機でトレンチを入れて遺構の確認を行ったところ土坑や溝状遺構が発見されたため、調査予定地全面について引き続き重機で表土を除去し、遺構の記録を行った。

検出された遺構は集石1基、溝1条、土坑3基であり、調査区の東半では縄文時代の遺物の遺物包含層も確認された。

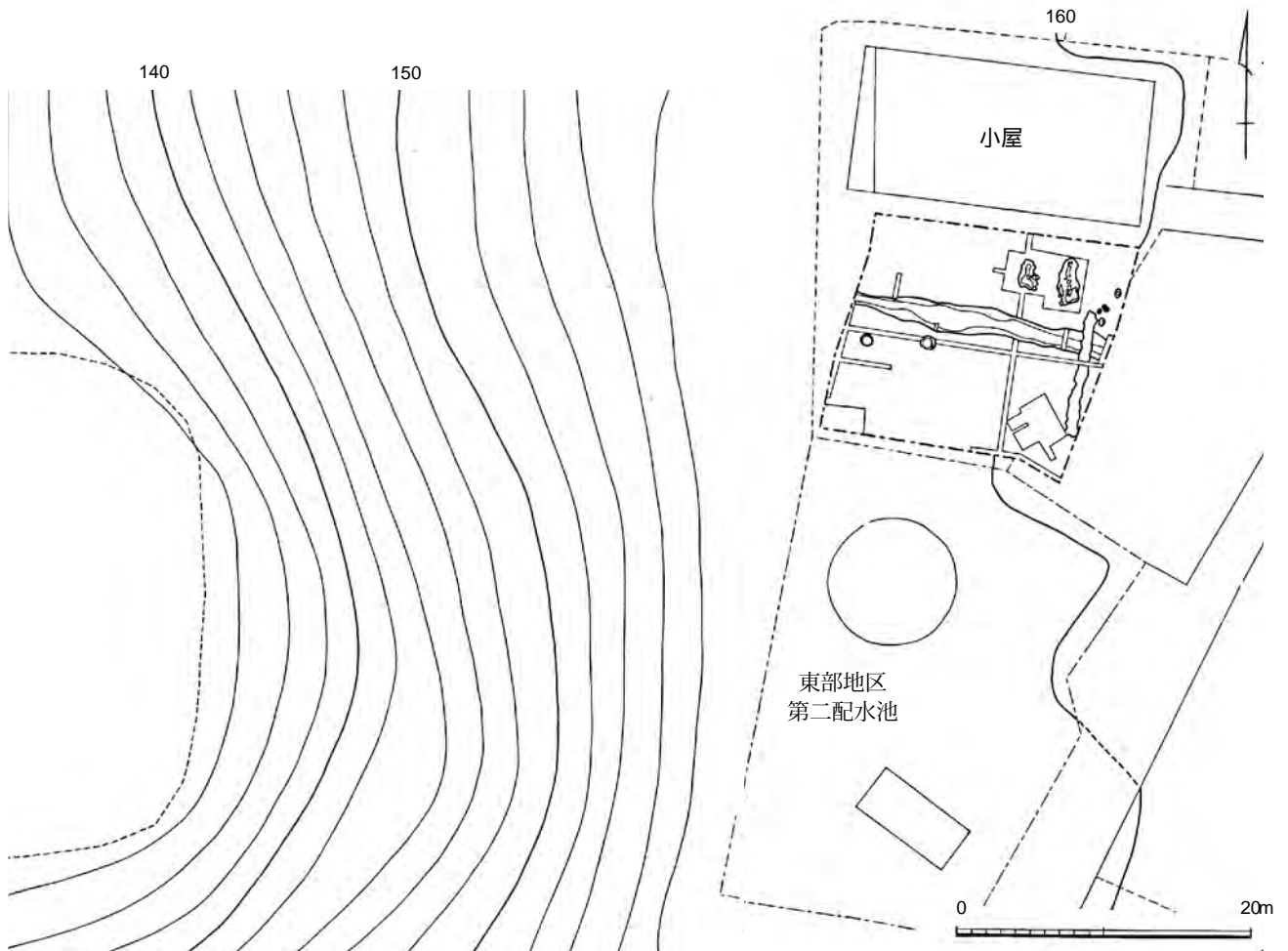
なお、今回の調査面積は約260疇である。



第3図 基本土層図 (1/20)

(2) 基本土層 (第3図)

調査区北壁にサブトレンチを設定して土層の確認を行ったところ、次のような堆積を基本としていた。1層は表土(耕作土)である。2層は暗茶褐色粘質土にブロック状の赤褐色粘質土が混入したもので、ややしまりがある。10 程度の水平堆積をなす。なおこの2層はこのサブトレンチでは確認されなかったが、調査区の他の壁面には見られることから広範に存在すると思われる。3層は



第4図 調査区位置図 (1/500)

暗茶褐色粘質土でしまりが強く、炭や土器の細粒様のものを若干含む。15～20 程度のほぼ水平な堆積をなす。4層は明赤褐色粘質土でしまりが強い。5～15 程度の堆積をなす。5層は暗赤茶褐色粘質土で、くすんだ色調である。しまりは強い。厚さは5～20 といった不揃いで凹凸のある堆積をなす。6層は赤茶褐色粘質土でしまりが強く、地山と考えられる。

上記の遺構のうち、近世以降のものについてはこの基本土層中の4層上面で確認され、縄文時代のものについては4・5層中にあたる。しかしながら調査区西半（台地端側）では縄文時代の層（4・5層）は確認されず、近世の層の直下は赤褐色の地山層（6層）となっており、場所によって堆積状況が異なるか、または畑地開墾の際に大規模な掘削と土壌改良が行われたようである。

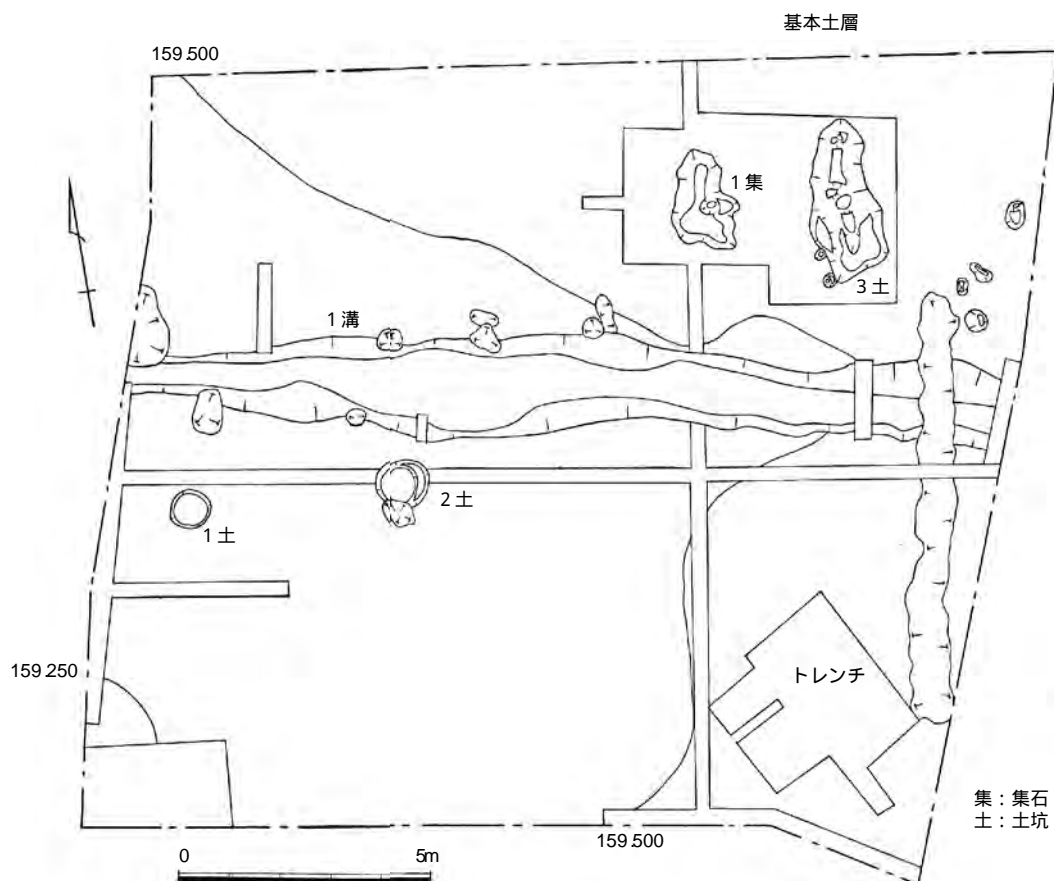
(3) 遺構と遺物

1) 1号集石（第6図、図版1・2）

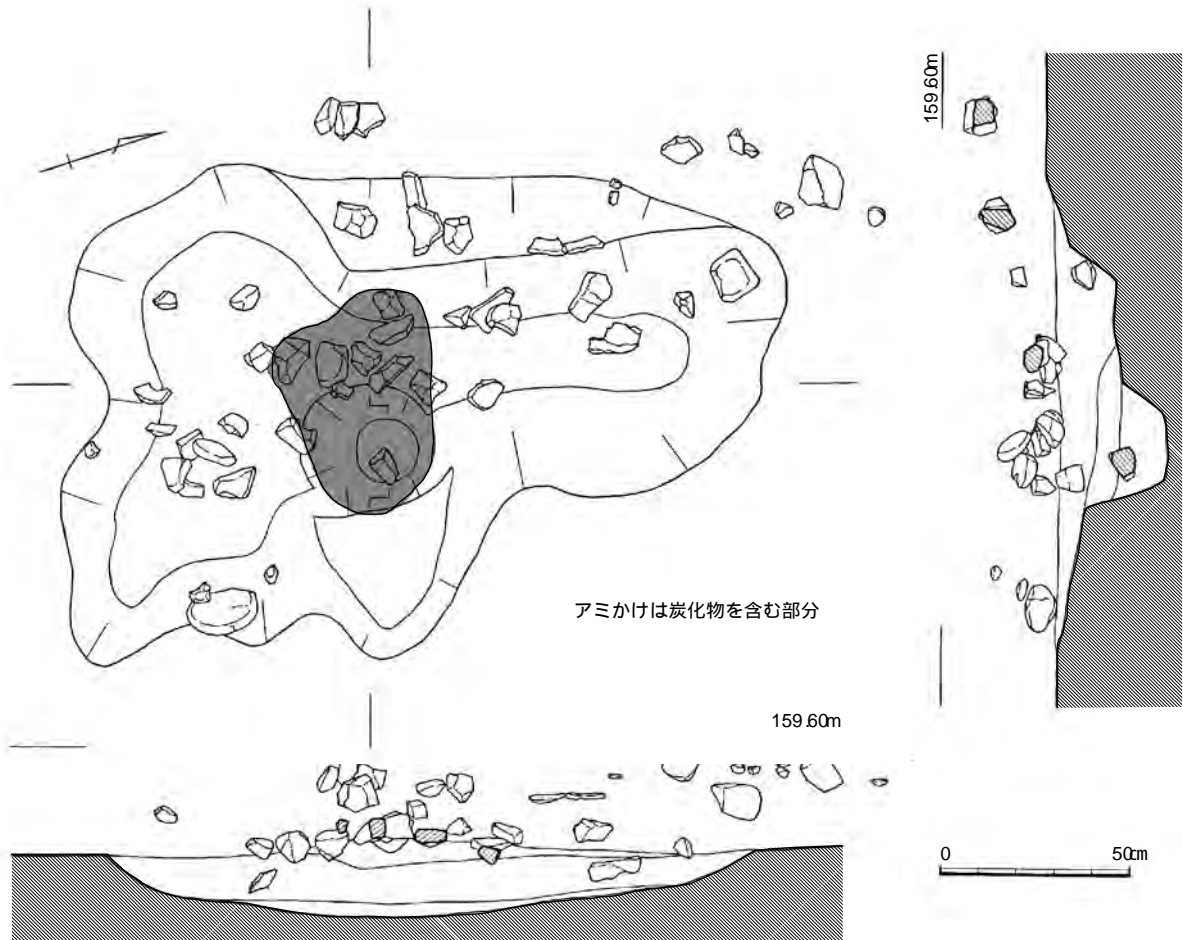
遺構検出作業中に調査区の東半において、地山と想定していた層中に赤変した礫が混入していることがわかり、礫の周辺2箇所にトレンチを設定して掘下げたところ、北側のトレンチで集石が1基検出された。南側のトレンチでも赤変した礫が点在しており、集石といえるほどの集中は見られなかったが、何らかの人為的な痕跡としては広がりを見せるようである。

集石は南北約2.1m、東西約1.1mの範囲にさほど緊密な状態ではなくややまばらに礫が存在していた。構成する礫は全面が赤変しているものもみられるが、密度が高くなっている中央部分では平たい礫が多用されている。それらの石は、上面は赤変しているが、下面すなわち接地面は熱を受けていない。

またこの集石は南北約1.9m、東西約1.3mの規模を測る不定形の土坑を伴う。土坑は断面皿状に



第5図 遺構配置図 (1/150)



第6図 1号集石実測図(1/20)

窪み、中心部にはさらに1段のピット状の掘り込みがあり、この部分の埋土にのみわずかに炭化物を含む。礫は土坑の床面付近で数個検出されたものを除きそのほとんどがこの土坑の上面付近に浮いた状態にあり、特に中心より北側では土坑の検出面よりも上で点々と連なって検出された。この集石からはピット状の掘り込み内より土器が1点出土している。

出土遺物(第8図・図版2)

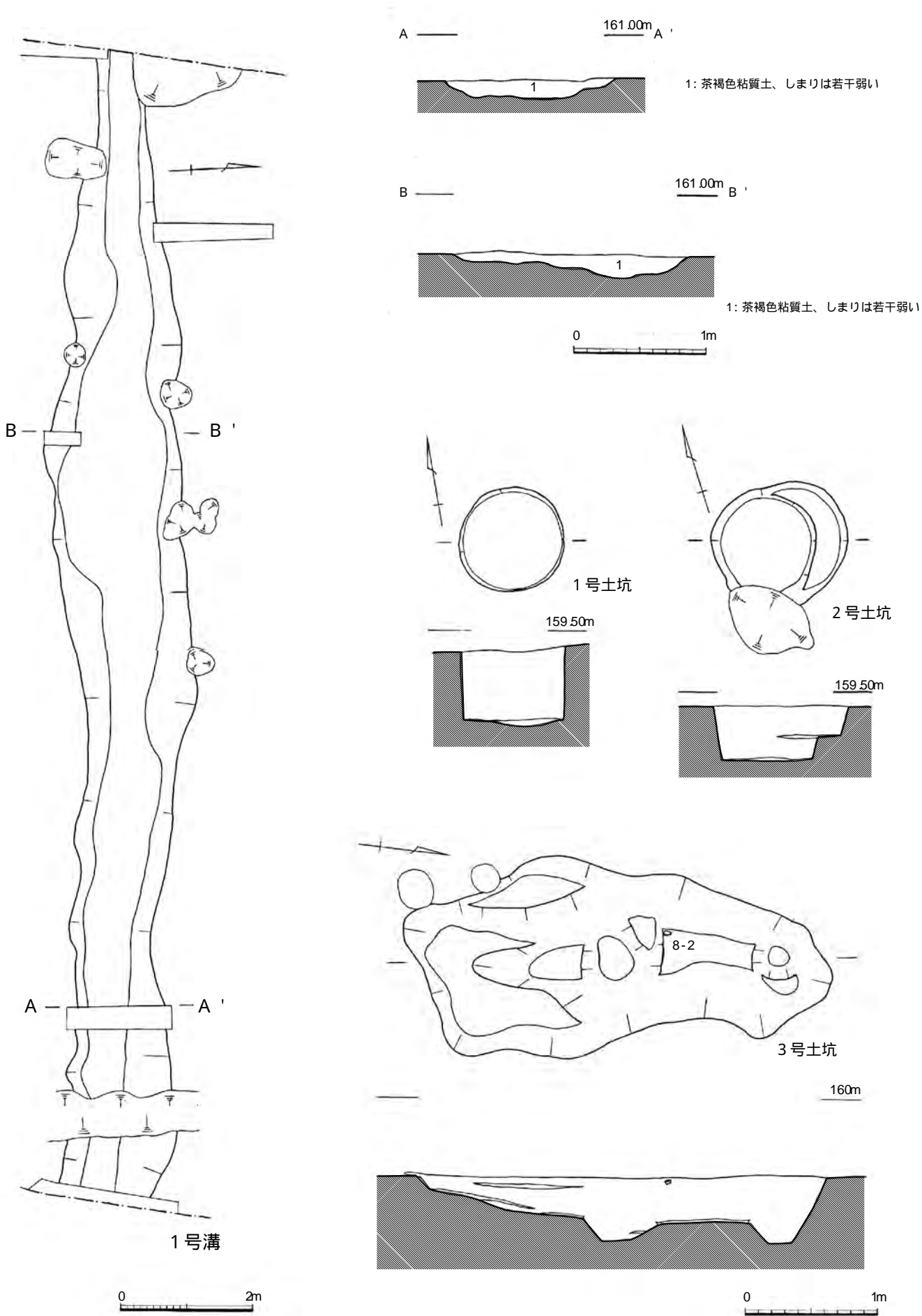
1は縄文土器の底部である。器形から深鉢と考えられる。器面調整は風化のため不明である。外面は部分的に黒斑がみられる。

2) 1号溝(第7図・図版1)

調査区のほぼ中央を東西に横切る不定形の溝である。調査区内での長さ約17.2m、最大幅約1.9m、深さは約10～20を測る。床面は断面皿状にくぼみ、西に向かってわずかに下がっている。埋土は若干しまりの弱い茶褐色粘質土の単層である。埋土からは陶磁器が数点出土している。

出土遺物(第8図・図版2)

4・5は陶器の碗である。4は内面見込部分には淡褐色の釉が、また高台の一部をのぞき全体に黒茶褐色釉が施釉されているが、風化のためツヤを失っている。5は高台端部をのぞき全体に青灰色の釉が施釉されており、細かい貫入がある。6・7は磁器の瓶である。6は口縁部から肩部破片、7は底部破片で、胎土の色調や厚さから同一個体と考えられるが、底部片が小さいため大きさが合致するかどうかは不明である。ともに乳白色を呈し、染付や色絵等の装飾は見られない。



第7図 1号溝・1～3号土坑実測図 (1/40,1/80)

3) 土坑 (第7図・図版2)

1号土坑 (第7図・図版2)

調査区西端付近で検出された土坑である。直径約0.8m、深さ約60 の規模を測る円形を呈し、壁面は垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦に整えられている。埋土は茶褐色粘質土に地山ブロックが混入したもので、上面はしまりがあるものの大半はややしまりが弱い。この土坑からは陶器片が1点出土している。

1号土坑出土遺物 (第8図・図版2)

8は陶器の皿の口縁部である。内外面ともに淡灰色釉が施釉され、貫入がある。

2号土坑 (第7図・図版2)

調査区中央付近で検出された土坑である。一部木の根による攪乱を受けているが、長軸約1.0m、短軸約0.9m、深さ約40 の規模を測り、深さ約20 の位置でひとつ段を設けている。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦に整えられている。埋土は かくしまる地山ブロックを含む茶褐色粘質土層と ややしまりが弱い同層、 しまりの弱い茶褐色粘質土層が互層状に堆積する。この土坑からは遺物の出土はなかった。

3号土坑 (第7図・図版2)

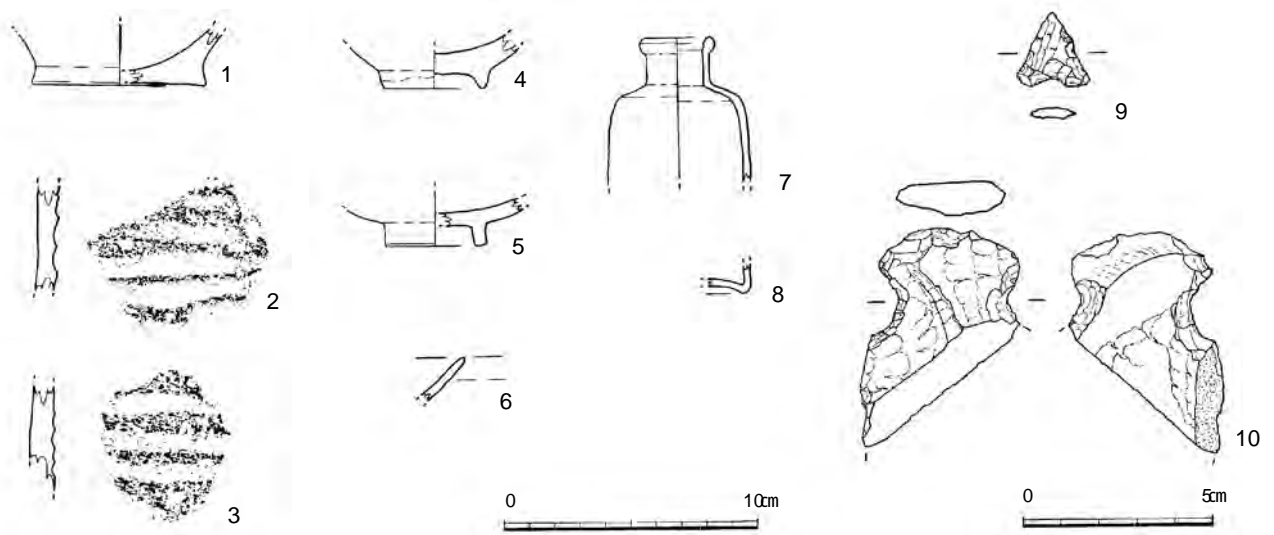
調査区東側で検出された土坑である。1号集石の東隣にあたる。長軸約3.0m、短軸約1.3m、深さは最大で約50 を測る不定形を呈し、底面には凹凸がある。埋土は淡褐色粘質土でしまりが大変強い。この土坑からは検出面近くで土器が1点出土している。

3号土坑出土遺物 (第8図・図版2)

2は縄文土器深鉢の体部である。表面には凹凸が見られ、細い粘土紐を貼り付けた隆起帯文と思われる。器面調整は風化のため不明である。

4) その他の遺物 (第8図・図版2)

3は1号集石および3号土坑が検出されたトレンチより出土した縄文土器深鉢の体部である。表面には隆起文が施されている。器面調整は風化のため不明である。9は調査区南側に設けたトレンチより出土した石鏃である。全長2.0 、重さ0.9gを測る。安山岩製。10は遺構検出段階で出土した石匙である。縦型で下半を欠損するが、両面から細かな調整を加えてつまみをつくりだす。残存長5.9cm、厚さ0.9 、残存重20.5gを測る。安山岩製。



第8図 出土遺物実測図(1/2・1/3)

(IV) まとめ

今回の調査では集石1基、溝1条、土坑3基を確認した。

まずそれぞれの遺構の時期を推定してみると、遺物の時期は大まかに縄文時代と近世以降の2時期に分けられ、集石と3号土坑が縄文時代に、溝と1号土坑は近世以降として捉えられそうである。詳しくみると、集石はそれに伴う土坑から縄文土器の深鉢底部が1点のみであるが出土している。厚さ約0.5と薄く、直径7あまりを測りわずかに上げ底となる平底の形態である。日田市内では集石は石ヶ迫遺跡や大部遺跡など4遺跡で確認されており、大部分が縄文時代早期～前期のものであることから考えて、本遺跡の集石も同時期と考えるとよさそうである。3号土坑からは流れ込みと考えられる縄文土器深鉢の体部片が出土している。複数貼付された隆起帯文は轟B式土器の特徴であり、前期と考えられる。また溝と1号土坑については特に溝出土の瓶は器肌が新しい印象があり、近世から近現代ごろまで下る可能性がある。

さてこれらの遺構の用途であるが、集石は構成する礫が被熱のため赤変し、中心部には平らな礫が多用されていることから、「集石炉」と考えられる。この集石以外にも周囲に赤変礫が散在し、同様な集石炉がほかにも存在したことが考えられる。次に溝については両岸が不定形で深さは浅いながらも台地端部まで伸び、付近に建物の痕跡がないことから、畑地の境界溝と考えられる。この台地が畑地化された時期は定かでないが、現在の景観が生まれたのは遡っても近世、おそらくは近世後期から明治・大正期と比較的新しい時期であろう。また3基の土坑については、1・2号土坑は溝とほぼ同時期の農作業関連のものとして、3号土坑は平面形も底面も不定形であり、用途ははっきりしないが木の根痕の可能性も考えられる。

今回の調査は中尾原台地南部～池辺原台地の調査としては初めてのものであり、北に有田塚ヶ原遺跡群^(注1)など各時代の多くの遺跡を擁する有田地区、南に求来里平島遺跡^(注2)などおもに弥生～古墳時代の遺跡が広がる求来里地区の分岐点としての立地から密度の高い遺跡を予想していたが、実際は畑地化によって大幅に土地改良された結果縄文時代と近世以降のわずかな遺構しか残っていなかった。これは今回の調査区が台地端部であることを反映しているためで、調査区付近の畑地では土器が採集されていることを考えると、周辺には弥生時代～古墳時代を含む遺跡が広がっていると想像される。この台地の今後の調査に期待したい。

注1) 行時 桂子編『石ヶ迫遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第49集 日田市教育委員会 2004
 行時 桂子編『クビリ遺跡・有田塚ヶ原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第58集 日田市教育委員会 2005
 行時 志郎編『有田塚ヶ原遺跡群』日田市教育委員会 1999
 注2) 土居 和幸編『求来里平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第38集 日田市教育委員会 2002
 ※上記のほかに、『日田市埋蔵文化財調査年報』（平成4～15年度まで既刊）も参照されたい。

第1表 出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法 量				調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第8図-1	1号集石	縄文土器	深鉢	-∴	-∴	(6.8)	(2.3)	不明	不明	A B C H	良	淡褐色	淡褐色	
第8図-2	縄1 T	縄文土器	深鉢	-∴	-∴	-∴	(4.3)	不明	不明	A B C H	良	淡褐色	淡褐色	隆起帯文あり
第8図-3	3号土坑	縄文土器	深鉢	-∴	-∴	-∴	(4.1)	不明	不明	A B C H	良	淡橙褐色	淡橙褐色	隆起帯文あり
第8図-4	1号溝	陶器	碗	-∴	-∴	(4.0)	(2.1)	黒茶褐色釉	黒茶褐色釉	-∴	良	黒茶褐色	黒茶褐色	胎土は灰褐色～褐色
第8図-5	1号溝	陶器	碗	-∴	-∴	(3.8)	(1.8)	青灰色釉	青灰色釉	-∴	良	青灰色	青灰色	胎土は淡灰色、貫入あり。
第8図-6	1号溝	磁器	瓶	(3.0)	(5.6)	-∴	(5.8)	白色	白色	-∴	良	白色	白色	染付等装飾なし。
第8図-7	1号溝	磁器	瓶	-∴	-∴	-∴	(1.2)	白色	白色	-∴	良	白色	白色	6と同一個体か？
第8図-8	1号土坑	陶器	皿	-	-∴	-∴	(1.7)	淡灰色釉	淡灰色釉	-	良	淡灰色	淡灰色	胎土は灰白色、貫入あり。

第2表 出土石器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法 量				備 考
				長さ	最大幅	厚さ	重さ	
第8図-9	縄2 T	安山岩	石鏃	2.0	2.0∴	0.3∴	0.9∴	完形
第8図-10	一括	安山岩	石匙	(5.9)	(3.9)	(0.9)	(20.5)	刃部欠損

法量の単位はcm。()は残存と復元を表す。

胎土：A;角閃石、B;石英、C;長石、D;赤色粒子
 E;白色粒子、F;黒色粒子、G;雲母、H;砂粒



調査区全景（真上から）



1号集石



1号集石完掘状況



1号溝

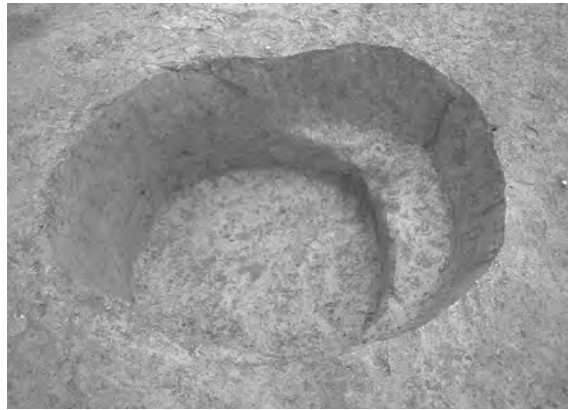


1号溝土層

写真図版 2



1号土坑



2号土坑



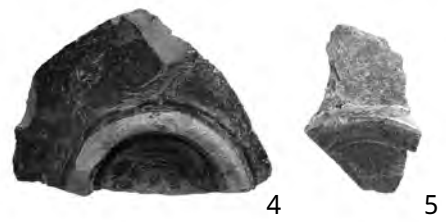
3号土坑



縄文土器出土状況 (集石周辺)



縄文土器



近世陶磁器



石器

数字は第8図の遺物番号に対応

報告書抄録

ふりがな	なかおぼるいせき
書名	中尾原遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	59:
編著者名	行時桂子
編集機関	日田市教育委員会文化課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1:
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1:
発行年月日	2005年3月31日（平成17年3月31日）

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中尾原遺跡	大分県日田市 大字北豆田 字原1838-6	44204-6	651144	33° 19' 25"	130° 57' 16"	20040818: ~20041014	260m ²	水道施設 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中尾原遺跡	集落跡	縄文 近世	集石1基、土坑3基、溝1条、 縄文包含層	縄文土器、石器、近世 陶磁器	

中尾原遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第59集

2005年3月31日

編集 日田市教育委員会 文化課
〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1

発行 日田市教育委員会
〒877-8601 大分県日田市田島2-6-1

印刷 有限会社 朝日堂印刷
〒877-0044 大分県日田市隈2-2-31